
同じ声のアーティスト

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同じ声のアーティスト

【Nコード】

N6168A

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

「人気アーティスト誘拐事件」の分岐小説です。出ているキャラに哀が加わっています。。

（前書き）

人気アーティスト誘拐事件の分岐小説。分岐シリーズ第2弾。

私の名前は灰原哀。

江戸川コナン君の同級生で、少年探偵団の1人。

といっても、小嶋君達になかば強制的に入れられたただけだね。

缶蹴りをしていた私達は、今人気のTWO-MIXの1人、高山みなみさんと知り合いになった。

なりゆきで、私達は彼女に食事をおごってもらえる事になったんだけど・・・

元太「パクパク・・・」

歩美「モグモグ・・・」

光彦「ゴクゴク・・・」

小嶋君達は高い物ばかり注文している。

私も工藤君もなかばあきれて、少しは遠慮しろという顔になっていた。

ちなみに私と工藤君は、メロンソーダしか注文していない。

みなみさんの方を見ると、サイフを見てシヨボクレている。

どうやら、あまりお金を持って来なかったようだ。

私はみなみさんに話しかける。

哀「あの・・・足りないなら、私と江戸川君も少し出しましょうか？」

コナン「な、なんでオレまで・・・」

みなみ「あ、いいのよ、私がおごってるんだし・・・」

哀「でも、この調子だとお金なくなりますよ？」

みなみ「アハハ・・・じゃあ少しだけカンパしてもらおうかなあ？」
そんな中、みなみさんが私達にある悩みを話してきた。

何でも、最近事務所のロッカーが荒らされたり、自宅のマンションの力ギ穴にこじ開けようとした跡があったり、悪質なイタズラ電話までくるらしい。

案の定、小嶋君達が『少年探偵団にお任せを！』などと言い出し、私と工藤君も話を聞く事になった。

イタズラが始まったのは、ラジオの生放送で新曲のデモテープをワ
ンコーラスだけ流してからだという。

その新曲のデモテープを、私達も聞いてみる事にした。

いい曲だけど、別に妙な声や音は入っていない。

どうやら、イヤガラセの原因はデモテープではないようだ。

そんな中、円谷君がおもしろい事に気がついた。

なんと、工藤君とみなみさんの声がそっくりなのだ。

みなみさんが、カゼを引いた時工藤君に代役を頼もつかないと言っ
てきた。

でも、私はすぐに反対した。

哀「ダメよー！だって江戸川君・・・音痴だもの」

工藤君は、困った顔をしていた。

でも、しょうがないでしょ、工藤君。

この前蘭さんと園子さんに連れられてカラオケに行った時、あなた
かなり音を外して歌ってたんだもん。

私も蘭さんも園子さんも、耳を塞ぐしか手段がなかったのに。

あの歌声では、お客さんを怒らせるのがオチだしね・・・

その後、事件が起きた。

なんと、みなみさんが相棒の椎菜さんと共に、怪しい男達に誘拐さ
れてしまったのだ！！

しばらくして目暮警部達が到着し、犯人から電話がかかってきた。ところが、犯人達は妙なヤツらだった。

目的はお金ではないと言うのだ。

犯人達はいわゆるストーカーという者達で、彼女達の物なら何でも欲しいらしい。

たとえば、みなみさんが店に置き忘れたバッグとか。

目暮警部は、部下に届けさせると言ったが、犯人達は甘くはなかった。

なんと犯人達は、私達にバッグを持って来させると言うのだ！！

工藤君は、犯人達の要求に応じる発言をし、私達はライブが始まるまでにみなみさん達を助けようと決意した。

犯人達の様子から、私と工藤君は、犯人達の狙いが新曲のデモテープだと推理した。

電車に乗り込んだ私達。

工藤君は、デモテープの歌詞を書き出している。さつきから私達は、山手線をぐるぐる回っているだけ。

普通に考えると、私達をからかっているようにも思える。

しかし、私と工藤君は犯人達の真の狙いがわかっていた。

おそらく犯人達は、私達が警察の視界から消えるチャンスを待っているのだろう。

案の定、次の駅で犯人達がデモテープを渡せと言ってきた。

トイレの中で、私か吉田さんにデモテープを渡し、持ってきて来させる

と。

私と工藤君は円谷君から、さらに重要な情報を聞いた。みなみさん達が新曲を思いついたのは、昇円寺というお寺を通りかった時だというのだ。

昇円寺といえば、去年の大晦日に正当防衛の殺人事件があったお寺だ・・・

それによって、私と工藤君の推理は確実になった。

工藤君は、私と吉田さんを危険な目にあわせないため、そして犯人達を油断させるために、あえて自分が行くと言いつ出した。

小嶋君達は賛成し、髪型が似ている吉田さんと工藤君は、トイレに入り着替え始めた。

私はある考えを思いつき、トイレに行くと行って中に入った。

数分後、犯人達から電話がかかってきた。

犯人達は、作戦が成功したと思っているだろう。

まさか、工藤君が吉田さんと入れ替わっているとは思えない。

第1の作戦通り、小嶋君達はドアが閉まる直前に電車に乗り込み、

工藤君はホームで倒れ置き去りにされた。

そして私は、柱の影から工藤君の様子をうかがっている。

第2の作戦で、小嶋君達はバッグを外に投げた。

目暮警部が電話で話しているスキに、工藤君は駆け出した。

私は見失わないように、工藤君の後を追う。

目暮警部と部下の1人はバッグが落ちた場所に向かった。

2人共、私と工藤君が消えた事には気づいてはいない。

でも、たぶんすぐにわかるだろう。

工藤君は雨の中を駆け抜けていた。
私はその後をこっそりつけていく。

公衆電話のベルが鳴り、工藤君は受話器を取った。

『うん、誰もいないみたい・・・』『うん・・・歩美がんばる!』
だつて。

演技力抜群ね、工藤君。

私は、クスクスと笑っていた。

工藤君が再び駆け出した。

私はあわてて、彼の後を追っていく。

コナンは再び公衆電話で受話器を取り、犯人の1人と話していた。

コナン「もしもし?」

「約束通り1人で来たようだね、お嬢ちゃん・・・さあ、そこから
見える倉庫の2階にテープを持って来るんだ。大好きなTWO-M
IXが待ってるぜ。」

その後、男はもう1人に電話をかけた。

哀「あゝん、どうしよう・・・工藤君を見失っちゃったよ・・・」
そう、私は工藤君を見失ってしまい、しかも道に迷っていた。
哀「どうしたらいいのかしら・・・ん?」

私の横を、見覚えのある男が通りすぎた。

哀「（ゆ、誘拐犯の片割れ・・・!!）」

私は、男の後をこっそりとつけていく。

しばらくして男は立ち止まり、電話をかけた。

「私だ。どうだ、そっちの様子は？」

「予定通りだ。あと少しで、お嬢ちゃんがテープを持って来る・・・」

「

「そうか。しかし万が一の事を考える。誰かとすり替わっている可能性もある。」

「そうだな。どうしたらいい？」

「ドアを開くようにして、ドアの内側で待ち伏せる。もし、ちがうガキだったら、捕まえて閉じ込めるんだ。」

「ああ、わかった。」

男の会話に、私はハッとした。

哀「（ど、どうしよう・・・もし、工藤君が吉田さんとすり替わっているバレたら・・・！大変だわ！目暮警部に連絡をしなきゃ・・・」

・」

ガシッ！

哀「え！？」

気がつくと、私は右腕を男につかまれていた。

哀「あっ・・・!!」

「聞いてたな？今の話・・・ん？お嬢ちゃんは、あの時のガキ連中の1人じゃないか・・・」

哀「あ・・・あわわ・・・」

私は会話を聞く事に気を取られ、男に近づきすぎていた。

「フフフ・・・一緒に来るんだ。」

男は、縄を取り出し私の手足を縛り上げると、私を抱き上げた。

哀「キヤアアア！放してよぉ・・・」

私は男に捕まってしまった。

哀「放して、放してえっ!!」

私はジタバタともがいた。

「黙ってな。」

私は男に口を手で塞がれた。

哀「んゝ、んゝ・・・モゴモゴ・・・」

私は何もできず、男に抱えられ、運ばれていった。

一方、何も知らないコナンは、倉庫の2階にたどり着いた。

コナン「持って来たよ、おじさん！」

コナンは声をかけるが、返事がない。

コナン「どうなってるんだ？いないのか・・・？あれ？開くぞ・・・」

コナンはドアを開けて中に入った。

コナン「あ、いたいた。もう大丈夫だよ、お2人さ・・・わっ！？」

コナンは突然、男に抱き上げられ、羽交い締めにされた。

コナン「えっ・・・？」

コナンを捕まえた男が、コナンをにらんでいる。

「やはりちがうガキだったか。ナメた事してくれるじゃないか・・・」

「

コナン「う・・・（麻酔銃を・・・）・・・あれ？」

コナンは麻酔銃を撃とうとしたが、歩美と入れ替わったため、武器はすべて歩美の方に行っていた。

コナン「し、しまった！武器は全部歩美ちゃんが・・・」

「ハハハ、観念するんだな、ボウヤ・・・」

数秒後、コナンは手足を縄で縛られ、床に転がされた。

ドサッ！

コナン「あうっ！」

「クツクツクツ・・・オレ達を甘く見てたな、ボウヤ・・・」

コナン「う・・・」

「私の言った通りだっただろ？」

コナン「！」

男の後ろに、もう1人の犯人が立っていた。

しかも、その手に誰か抱えている・・・

コナン「は、灰原！」

哀が手足を縄で縛られ、男に抱えられている。

哀「うう、江戸川君・・・」

男は、哀をコナンの前に突き飛ばした。

ドン！

ドサツ！

哀「キヤツ！」

コナン「灰原、オマエ・・・どうして・・・」

哀「ごめんなさい・・・あなたを追いかけて来たんだけど、途中で見失っちゃって・・・この人に捕まっちゃったの・・・」

哀は、コナンの横に行った。

「ガキが2人そろってナメた事しやがって・・・」

「まあ、目当ての物は手に入れたからな・・・」

男は、コナンから奪ったデモテープを取り出した。

「この2人の事だ、コピーも取ってあるんだろが・・・」

「さて、コイツら、どうしてやるうかね・・・」

コナン「く、くそっ・・・」

哀「え、江戸川君・・・」

コナンと哀、みなみと椎菜は、絶体絶命の危機にさらされていた・・・

その頃、目暮警部達と歩美達は、電車を降りて、線路沿いの道にいた。

目暮「何い！？コナン君と歩美君が入れ替わって、哀君がコナン君の後を追っていった？」

光彦「犯人の真の狙いは、デモテープだったんですよ！」

元太「そのテープを歩美か灰原に渡して、警察をまけて犯人が言うからよ・・・」

歩美「コナン君が私と変わってくれて・・・」

光彦「灰原さんはコナン君の後を追うって言ったんですよ・・・」

目暮「しかし、なんでワシらにその事を言わなかったんだね？」

光彦「犯人の作戦が成功したように思わせた方が、犯人が油断するでしょ？」

歩美「だから、それまでこの作戦を気づかれちゃいけないって・・・」

目暮「しかし、これで犯人の居所がつかめなくなってしまった・・・入れ替わったコナン君も、後を追っていった哀君も危険だ・・・」

歩美「それなら、この追跡メガネを使えばいいよ！」

目暮「そうか。しかし、2人が心配だな・・・」

元太「大丈夫だよ、コナンは武器をたくさん持って・・・」

歩美「あ・・・キック力増強シューズ、私がいってた・・・」

目暮「何！？」

歩美「そういえば、時計型麻醉銃も私の腕に・・・」

元太「おいおい、じゃあ・・・」

光彦「コナン君は丸腰で、無防備って事ですか？」

歩美「そ、そうみたい・・・」

目暮「な、なんて事だ・・・」

歩美「目暮警部、急がないと、コナン君達が危ないよ！」

目暮「そ、そうだな！」

歩美は追跡メガネのスイッチを入れ、駆け出した。
目暮警部達も、歩美のあとを追っていく。
歩美「コナン君、灰原さん！待っててね！！」

その頃、倉庫に閉じ込められたコナン達は、命の危険にさらされていた。

「フッフ・・・警察が来る気配は全くないな・・・」

「かわいそうだが、ここでボウズ達の命は終わりだ。さあ、最後に残したい言葉はあるか？」

コナン「ああ、あるよ。アンタ達を監獄へと誘う、鎮魂歌がね・・・」

「レクイエムだと？」

哀「カウントダウンの鐘が響くよ・・・心着替えて走り出せと、ホラ今も1つ2つ・・・」

コナン「季節外れの花火のように、どこかで誰かが告げる始まりの音・・・」

「キ、キサマら・・・」

哀「そう、これはTWO・MIXの新曲の歌詞・・・そしてあなたがTWO・MIXを誘拐した動機よ・・・」

コナン「そうでしょ？宮原悟史さん？」

哀「あなたは去年の大晦日の夜、身元不明の男を昇円寺のそばで殺し、目暮警部に取り調べを受けたんですよね？」

「くっ・・・」

椎菜「去年の大晦日・・・昇円寺・・・」

みなみ「それって、私達がその曲を思いついた場所じゃない！」

コナン「あつたんだよ・・・除夜の鐘の響く11時50分頃・・・」

その寺のそばで殺人事件がね．．．この人の通報で駆けつけた警察は、拳銃を持ったまま死んでいた男の手から硝煙反応が出た事や、断層の空薬夾が一発だった点から、この人の『拳銃を持った変質者に襲われ、もみ合ってるうちに銃が暴発した』という証言を信じた．．．この事件は正当防衛だと．．．」

哀「だけど、実際はちがつていたのよ．．．その拳銃は、最初からその男を殺すために持ってた、あなたの拳銃だわ．．．最初の一発で心臓を撃ち抜いたあなたは、再び同じ断層に弾を込め、地面に発射した．．．硝煙反応が残るように、その男の手に握らせてね．．．」

コナン「辺りには目撃者もおらず、あなたが警察に通報してる間に、余分な弾と薬夾をあなたの後ろにいる男が持ち去る事で、万事うまくいくはずだった．．．」

哀「でもいたのよね．．．その時の音を聞いてた人達が．．．」

みなみ「それが、私達．．．」

コナン「ああ、みなみさん達TWO-MIXの2人だよ．．．『カウントダウンの鐘』は除夜の鐘．．．『2つの花火の音』は2発の銃声．．．そして歌詞の冒頭の『駆け抜けてきた1996』は1996年．．．これにみなみさん達がラジオで言っていた『昇円寺』を加えれば、2つの音がした日時、場所がわかってしまっただけだ．．．」

哀「あなた達も聞いたんでしょ？デモテープが流れたそのラジオを．．．だから、みなみさん達を誘拐したのよ．．．警察がこの事に気づく前に、2人をテープごと抹殺するためにね！」

宮原悟史「フ．．．なかなかかしこいじゃないか．．．その通り．．．私は宮原悟史だよ．．．殺したのは、以前強盗事件を起こした時の仲間だったヤツだ．．．いきなり戻ってきてサツにバラすと私達を脅したんで、死んでもらったのさ．．．」

哀「銃殺してそのまま逃げれば、足はつかなかったんじゃないの？」
悟史「しかたないだろ、見られてしまったんだから．．．寺の和尚

に私の顔を・・・幸い、和尚は耳が遠かったからそのままにしていたが、まさかあの銃声を聞いて、歌にしているヤツらがいたとはね・・・」

そう言うと、宮原は拳銃をコナン達に突きつけた。

悟史「さあ、もう終わりだ・・・」

「そこまでだ!!」

悟史「な、何だ!？」

「いつたい、何だって・・・」

ガチャ!

プス!

ドサ。

悟史「お、おい・・・」

ヒュオオオ!

悟史「!」

ドガッ!!

ドッ・・・

コナン「目暮警部!」

哀「みんな・・・!」

麻酔銃を撃つたのは光彦、みなみのバッグを蹴つたのは歩美だった。

目暮「なんとか・・・間に合ったか・・・」

その後、犯人の2人は警察のお縄についた・・・

当然、オレ達少年探偵団は大目玉をくらったが・・・

高山みなみさんのとりなしもあってとりあえず無罪放免となり・・・

目暮警部のパトカーで武道館へ直行した・・・

その後、オレ達少年探偵団はTWO・MIXの武道館ライブに乱入し・・・なんとか無事に武道館ライブは終了した・・・

その後・・・

みなみ「はいこれ！今日助けてくれたお礼よ！お家で練習してね！」

そして翌日・・・

コナン・哀「アイフィルユアラプリフレクション・・・見つめ返す瞳にいく描いてえ遙かなあ・・・」

園子「さっきからこの曲ばっか・・・」

蘭「でも全然うまくならないね・・・」

園子「合わせてる哀ちゃんも大変だわ・・・」

コナン・哀「ネバエ〜ンディ〜ングストオリイ・・・」

（後書き）

どうでしたか？分岐シリーズの第2弾です。

この作品に哀が出ていた事に？の皆さん。

実は青山先生によると、哀は平次が初登場した10巻で初登場させるつもりだったそうです。

なので、それをふまえて今回の作品を書かせていただきました。

感想もぜひくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6168a/>

同じ声のアーティスト

2010年12月2日00時57分発行